

桜井 D 遺跡

— 古代集落跡の調査 —

序 文

文化財は、我国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた国民共有の財産であり、その地域の歴史、伝統、文化などの理解のために欠くことのできないものであると同時に、将来の文化の向上・発展の基礎をなすものであります。

とりわけ、地中に埋もれている埋蔵文化財は、文字資料だけでは知ることができなかった先人の生活の様子や、文字がまだなかった時代の人々の生活や文化について、私たちに多くの情報を与えてくれます。

近年、南相馬市内では広範囲にわたり開発の波が押し寄せつつある一方で、長い歴史を経て保存されてきた埋蔵文化財が一日にして失われてしまう危険性があります。このような状況のなか、教育委員会では、埋蔵文化財の保護のため、開発が行われる前に、遺跡の範囲や性格などの資料を得る目的で、分布調査や試掘調査を実施しております。

開発に際しては、これらの資料をもとに、関係の方々及び機関と遺跡についての保存協議を行い、保存が困難な場合については、記録保存のための発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成20年度に、集合住宅新築に伴い失われてしまう桜井D遺跡について実施した発掘調査の成果報告書です。今後この報告書を、埋蔵文化財の保護、地域史研究のために活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、地権者の皆様をはじめ、調査にご協力いただきました方々に、心から感謝を申し上げます。

平成21年3月

南相馬市教育委員会
教育長 青木 紀男

例 言

1. 南相馬市は原町市・相馬郡小高町・同鹿島町の1市2町による市町村合併を経て、平成18年1月1日付で誕生した新市で、原町市は南相馬市原町区となった。
2. 本書は、集合住宅新築に伴う桜井D遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
3. 発掘調査は、南相馬市教育委員会が施主である吉田和夫氏の委託により実施した。
4. 発掘調査は、以下の体制で実施した。

調査主体 南相馬市教育委員会

事務局 南相馬市教育委員会文化財課

教 育 長 青 木 紀 男
事 務 局 長 藤 原 直 道
事 務 局 次 長 門 馬 清 一
文 化 課 長 烏 中 清
主 査 佐 藤 友 之
事 務 補 助 萩 原 佐 千 子

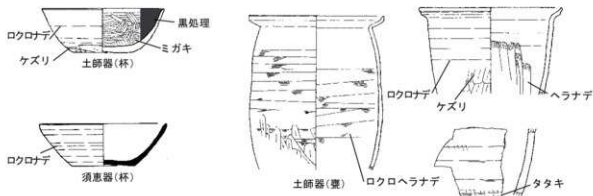
調査担当 文 化 財 課

文化財課長補佐 堀 耕 平
主任学芸員 川 田 強
主任文化財主事 荒 淑 人
学 芸 員 藤 木 海
学 芸 員 佐 川 久
整 理 補 助 員 渡 部 定 子

5. 本報告書に掲載した文章、挿図、図版は佐川が執筆、作成した。
6. 本報告書の編集は佐川がおこなった。
7. 調査に関しては以下の業務委託を実施した。
株式会社日建：基準点測量
8. 発掘調査、報告書作成にあたり、次の方々から指導・助言を得た。記して感謝申し上げる。
文化庁文化財部記念物課、福島県教育庁生涯学習領域文化財課、福島県立博物館、(財)福島県文化振興事業団、福島県文化財センター白河館まほろん、森 幸彦(福島県立博物館)、松本 茂・青山博樹(福島県文化振興事業団)、阿部健太郎・梶原圭介(会津美里町教育委員会)、嶋村一志(泉崎村教育委員会)、吉田陽一(二本松市教育委員会)、三瓶秀文(富岡町教育委員会)、長谷川 真(岩手県宮古市教育委員会)、岡村道雄・澤田正昭・山田昌久・田中哲雄・小林敬一(浦尻貝塚調査指導委員会)、岡田茂弘・鈴木啓・今泉隆雄・佐川正敏・宮本長二郎・田中哲雄・小林敬一(泉庵寺調査・整備指導委員会) (順不同・敬称略)
9. 発掘調査に際しては、次の機関及び個人から協力を得た。記して感謝の意を申し上げます。
吉田和夫、大東建託株式会社 (順不同 敬称略)
10. 調査で得られた資料は、南相馬市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 図中の方位は真北方向を示し、水系レベルは海拔高度を示す。
2. 遺物の断面黒ベタは須恵器、それ以外は白抜きで図示した。



3. 掲載した遺構・遺物の縮尺率は図中に示した。
4. 遺構の推定線は点線で表した。
5. 後世の擾乱は一点鎖線で表した。
6. 平面図ならびに断面図に用いたスクリーントーンの内容は下記に示した。
被熱範囲・焼土：■■■■ 柱痕：■■■■ 未掘部分：■■■■
7. 断面図の土層は、基本層位をLⅠ・LⅡ…で、遺構堆積土を $\theta 1$ ・ $\theta 2$ で表示した。
8. 本文並びに図作成に使用した記号・略号は、以下の内容を示す。
SI：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 SX：性格不明遺構 P：ピット
9. 遺物の写真は縮尺不同である。
10. 遺物の写真の番号は挿図番号に対応している。

目 次

序 文	i
例 言	iii
凡 例	iv
目 次	v
挿 図 目 次	vi
表 目 次	vi
図 版 目 次	vi
第1章 遺跡を取り巻く環境	
第1節 南相馬市の概要	1
第2節 南相馬市の地形と地質	1
第3節 歴 史 的 環 境	5
第2章 調査概要	
第1節 調査に至る経緯	9
第2節 調査の方法	10
第3節 調査日誌	10
第3章 調査内容	
第1節 遺 跡 の 概 要	11
第2節 調査区について	11
第3節 基 本 土 層	11
第4節 遺 構 ・ 遺 物	14
第1項 竪穴住居跡	
第2項 掘立柱建物跡	
第3項 土 坑	
第4項 その他の遺構	
第5項 遺構外出土遺物	
第4章 まとめ	
第1節 遺物について	31
第2節 遺構について	32
引用・参考文献	
写 真 図 版	
報 告 書 抄 録	
奥 付	

挿 図 目 次

図1 南相馬市位置図……………	1	図13 1号住居跡出土遺物②……………	19
図2 切峰図……………	2	図14 1号住居跡出土遺物③……………	20
図3 地形略図……………	3	図15 2号住居跡実測図……………	21
図4 地質図……………	4	図16 3号住居跡実測図……………	23
図5 奈良・平安時代遺跡分布図……………	8	図17 4号住居跡実測図……………	24
図6 調査地点位置図……………	9	図18 4号住居跡出土遺物……………	24
図7 基本土層……………	12	図19 5号住居跡カマド実測図……………	25
図8 遺構分布図……………	13	図20 1号掘立柱建物跡実測図……………	26
図9 1号住居跡実測図……………	15	図21 1号土坑・2号土坑実測図……………	27
図10 1号住居跡掘形実測図……………	16	図22 性格不明遺構・ビット分布図……………	29
図11 1号住居跡カマド実測図……………	17	図23 遺構外出土遺物……………	30
図12 1号住居跡出土遺物①……………	18		

表 目 次

表1 奈良・平安時代遺跡一覧……………	7	表3 4号住居跡出土遺物観察表……………	34
表2 1号住居跡出土遺物観察表……………	33	表4 遺構外出土遺物観察表……………	35

図 版 目 次

図版1……………	39	図版3……………	41
1 A地区全景		1 2号住居跡完掘状況	
2 B地区全景		2 2号住居跡断面	
図版2……………	40	3 3号住居跡完掘状況	
1 1号住居跡完掘状況		図版4……………	42
2 1号住居跡断面		1 1号掘立柱建物跡完掘状況	
3 1号住居跡遺物出土状況		2 1号掘立柱建物跡P1完掘状況	
4 カマド完掘状況		3 1号掘立柱建物跡P2完掘状況	
5 カマド断面		4 1号掘立柱建物跡P7完掘状況	
6 カマド遺物出土状況		5 1号掘立柱建物跡P9完掘状況	

図版 5	43	5	4号住居跡完掘状況	5	4号住居跡完掘状況
1	1号土坑完掘状況	6	4号住居跡断面	図版 7	45
2	1号土坑断面	図版 8	1号住居跡出土遺物①	1	1号住居跡出土遺物①
3	2号土坑完掘状況	図版 9	1号住居跡出土遺物②	1	1号住居跡出土遺物②
4	2号土坑断面	図版 10	1号住居跡出土遺物③	1	1号住居跡出土遺物③
5	ピット群完掘状況①	2	1号住居跡出土鉄製品・鉄滓	2	1号住居跡出土鉄製品・鉄滓
6	ピット群完掘状況②	3	2号住居跡出土鉄滓	3	2号住居跡出土鉄滓
7	ピット群完掘状況③	図版 10	4号住居跡出土遺物	1	4号住居跡出土遺物
8	ピット群完掘状況④	2	遺構外出土遺物	2	遺構外出土遺物
図版 6	44				
1	C地区遺構検出状況①				
2	C地区遺構検出状況②				
3	C地区遺構検出状況③				
4	4号住居跡検出状況				

第1章 遺跡を取り巻く環境

第1節 南相馬市の概要

福島県南相馬市は、阿武隈高地の東側、太平洋に面する浜通り地方の中央よりやや北側に位置し、北は相馬市、西は相馬郡飯館村、南は双葉郡浪江町に接している。本市は市内を3つの行政区に分けており、北から鹿島区・原町区・小高区となる。面積は約398.5㎓、人口は約72,000人からなる相馬・双葉地方の政治経済の中核都市である。

主要交通は、市内を南北に縦走する国道6号線ならびにJR常磐線である。近年では、市街地の西側を縦貫するように建設が進められている高規格道路の常磐自動車道により、周辺地区の自然環境や市内道路網の在り方が変容しつつある。



図1 南相馬市位置図

第2節 南相馬市の地形と地質

南相馬市は東に太平洋を臨み、西には阿武隈高地が展開している。阿武隈高地は南北に縦走し、東西約50km、南北約200kmの規模を有する。

市内の地形を見ると、市内西側にある山地域と市内東側にある海岸平野に2大別される。山地域となる阿武隈高地の山々は、起伏が著しく傾斜の強い斜面が形成されるが、全体的に山々の高まりが揃った様相を示すという特徴がある。原町区付近の山々は、山地起伏量400～600m程の中起伏山地が多く、海岸平野の一部には起伏量200～400mの小起伏山地が分布している。これらの山地の標高は500m前後、海岸平野付近では標高40m以下を計測する。

阿武隈高地を構成する山地の地理的な特徴としては、山地縁辺から海岸低地に向かって延びる標高20～40m程度の低位丘陵を連ねることにある。これらの低位丘陵は小規模な谷と尾根による複雑な樹枝状の形状を呈し、海岸線に到達する付近では海食崖になる部分もある。丘陵地の起伏量は200m以下を示し、阿武隈高地と比較すると、一段と低平な背面をもち、北北西から南南東方向に延びる連続性のある地形として各地に発達している。背面の多くは海岸地方の市町村の境界となっている。

海岸平野では、阿武隈高地に接する小規模な山麓地の発達を見るほか、扇状地や段丘等の地形が発達している。市内には阿武隈高地から東流するいくつかの河川があり、この河川は先述した低位丘陵間を流れ、所々で小規模な支流河川との合流を繰り返しながら、太平洋に到達し

ている。

河川により形成される段丘は、河床の発達高度により、大きく低位丘陵、中位丘陵、高位丘陵と区分されており、それぞれの段丘が上下2段の合計6段の段丘が確認されている。

段丘には河岸段丘・海岸段丘がありいずれも河成段丘によるもので、海性段丘は小沢から塚原の一部で見られる程度である。

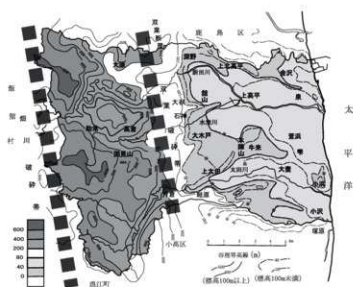


図2 切峰図

このような地形を有する南相馬市の地質を構成する基盤層は、古生代末期アバラキア褶曲と、中生代末期のララマイド褶曲に代表される二度に渡る世界的な造山運動の際に、古生層及び中生層に貫入した古期・新期・最新期の花崗岩・変成岩類で構成されている。

阿武隈高地は、古くは古生代の先デボン紀（助常変成岩類）から、最も新しい新生代中頃、新第三紀中新生に至るまでの地質を有し、北上高地と並んで日本最古の地質構造を形成している。

市内を構成する地質を見ると、西部にある阿武隈高地には畑川破碎帯が発達している。畑川破碎帯は、日本列島の土台を構成する地質帯である阿武隈帯と南部北上帯の境界となり、この破碎帯から西側の阿武隈帯には花崗岩が広く分布している。畑川破碎帯の東側には、花崗岩ならびに相馬古生層などから成る先第三系があり、この付近に双葉断層が発達している。

双葉断層の東側には中生代の相馬中村層群や、市内の低位丘陵を構成する新第三系などが分布している。

阿武隈高地裾部から東に派生する低丘陵は、新生代第三紀に形成された鮮新統の仙台層群が広く発達する。この仙台層群は、下位から亀岡層・竜の口層・向山層及び大年寺層と総称される固結度の低い凝灰岩質砂岩・泥岩で構成されている。

丘陵部では第四紀洪積世における水河期と間水期の海水準変動によって海成及び河成の段丘が構成されている。段丘は大きく高位・中位・低位の3つに区分され、それぞれが第Ⅰ・Ⅱ段丘堆積物に細分されている。

高位第Ⅰ段丘堆積物は、垂角の大礫から巨礫を主とする堆積物を挟み、畦原付近では最大10mの層厚を持つ。高位第Ⅱ段丘堆積物は、亜円礫が混じる円礫層を主とし、砂層・シルト層を挟む。上位1mの地点には風化火山灰層をのせ、上太田北側の陣ヶ崎・本陣山・小浜・石神東部・深野に分布する。中位第Ⅰ段丘堆積物は、垂角ないし亜円の中礫〜大礫からなり、海岸部では砂層を挟んでいる。上位には軽石層を挟む風化火山灰層をのせ、大木戸南西部台地、深野、上

北高平に分布する。中位第Ⅱ段丘堆積物は、垂角～垂円の中礫～大礫からなる。原町区の市街地から雲雀ヶ原一带に広く発達し、牛来・萱浜に散在する。低位第Ⅰ段丘堆積物と低位第Ⅱ段丘堆積物は、垂角～垂円の中礫～大礫で構成され、海岸部により近い地域まで分布するものを第Ⅰ段丘堆積物、上流部のみ分布するものを第Ⅱ段丘堆積物と区別している。

高位段丘堆積物は真野川流域で発達し、所々に自然堤防堆積物が見られる。新田川・太田川流域では、上部に風化火山灰層をのせた礫及び砂で構成される高位第Ⅰ段丘堆積物と、中位第Ⅱ段丘堆積物が広く発達し、小高川流域では中位第Ⅰ・第Ⅱ段丘が顕著である。低丘陵の間には、各河川が樹枝状に開析した谷間に土壌が埋没した沖積平野が入り込んでいる。

宮田川河口では、かつて井田川浦という東西1.8km、南北1kmという大きな潟湖が形成されており、大正末期～昭和初期にかけて干拓されている。潟湖を形成した浜堤は、浦尻貝塚の南東に位置する北原貝塚の東側の堤状段丘から北に約1.7kmの範囲に展開し、小高川河口でも浜堤と前川浦が形成された。市内北側には八沢浦が形成されたが、この八沢浦も干拓が進みその姿を残していない。

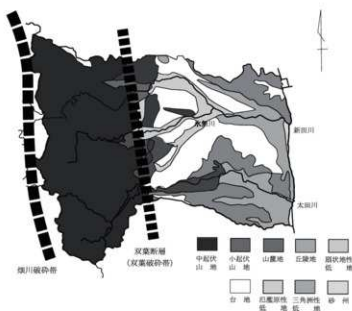
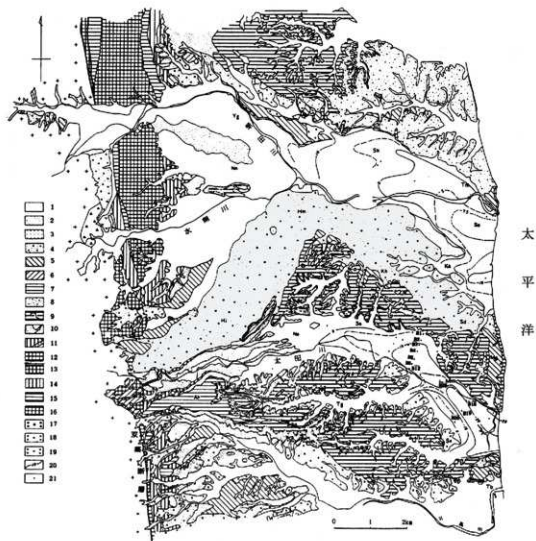


図3 地形略図



1: "沖積層", 2: 第6段丘構成層, 3: 第5段丘構成層, 4: 第4段丘構成層, 5: 第3段丘構成層, 6: 第2段丘構成層, 7: 第1段丘構成層, 8~11: 亀の口層, 8: 同c層(砂岩), 9: 同c層(シルト岩・京塚沢凝灰岩), 10: 同b層, 11: 同a層, 12~19: 基盤岩類, 12: 燧石層, 13: 小山田層, 14: 富沢層, 15: 中の沢層, 16: 樹窪層, 17: 古生層, 18: 花崗岩類, 19: 黒岩, 20: 亀の口層上面標高(m), 21: ボーリング地点と孔番, Ah: 畦原, Bb: 馬場, Hi: 雲雀ヶ原, Hm: 原町市街, Ht: 東高松, Ka: 菅浜, Kh: 北原, Kk: 片倉, Mg: 間形沢, Mm: 米々沢, Nn: 長野, No: 中太田, Om: 大壺, Sd: 雫, Se: 下江井, Sk: 下北高平, So: 下太田, Ss: 下秩佐, Tb: 塚原, Tg: 鶴谷, Tm: 館前, Yg: 横上

図4 地質図

第3節 歴史的環境

南相馬市内には600箇所以上の周知の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。ここでは奈良・平安時代の遺跡について触れてみたい。

奈良・平安時代における律令体制になると、南相馬市は陸奥国行方郡家の支配する行政領域に編成される。行政の中心地となる行方郡家は、市内を東流する新田川河口に創建された泉廃寺跡であることが明らかとなっている。

泉廃寺跡は新田川河口付近の河岸段丘縁辺から沖積地に立地し、遺跡に関連する遺構群は東西約1km、南北約800mの約120,000㎡の範囲に広がっている。古代の瓦が出土することや建物の基礎となる礎石が遺存していることから昭和31年に福島県史跡に指定された。これまでの調査の結果、郡家は7世紀末に造営が開始され10世紀に廃絶するまでの間に、2度の大きな変更を経ながら律令政府の地方行政支配の拠点として機能していたと考えられる。

郡家には郡庁・正倉・館といった施設とともに、運河状施設や寺院の存在も示唆される。遺跡の西側では路面状の硬化面と道路側溝の可能性のある溝跡が検出されたことから、郡家に接して道路が建設されていた可能性が考えられ、律令時代の行政構造を知るうえで重要な発見で、その全容解明が待たれる。

市内には寺院跡と推定される遺跡が認められる。植松廃寺跡は新田川北岸の河岸段丘に所在する。本格的な発掘調査が実施されていないため遺跡の詳細は不明であるが、過去の表面採取では、単弁四葉蓮華文軒丸瓦・有蕊弁蓮華文軒丸瓦等の瓦群が得られている。

横手廃寺跡は真野川北岸の河岸段丘に位置する寺院遺跡で、遺跡内には現在も多数の礎石が残存し、単弁八葉軒丸瓦等の瓦群が表採されることから、昭和54年に福島県史跡指定をうけているものの、発掘調査は行われていないことから遺跡の詳細は全くわかっていない。なお、横手廃寺跡で表採された樹枝状タタキ平瓦は植松廃寺跡のものと同じである。

植松廃寺跡ならびに横手廃寺跡は具体的な内容は不明であるが、行方郡内の有力豪族が建立した氏寺の可能性が考えられる。

真野川南岸にある真野古城跡では、単弁八葉蓮華文丸瓦等の丸瓦群が確認されているが、過去の発掘調査では遺跡の内容を示す知見が得られておらず詳細は不明である。

市内で瓦の生産が確認されている遺跡としては、京塚沢瓦窯跡、犬這瓦窯跡、入道迫瓦窯跡、白坂瓦窯跡が挙げられる。太田川河口域の丘陵にある京塚沢瓦窯跡・犬這瓦窯跡で焼成された瓦群と同類のものが泉廃寺跡から出土していることから、泉廃寺跡の所用瓦を生産した瓦窯と考えられる。

入道迫瓦窯跡は新田川北岸の低位丘陵に所在し、植松廃寺跡と同種の瓦が出土することから、植松廃寺跡に瓦を供給したと推測される。また、入道迫窯跡は須恵器生産も行われていた瓦陶兼業窯であり、8世紀末から9世紀前半に操業していたことが明らかとなっている。

この他に須恵器生産の遺跡は、滝ノ原遺跡、町池窯跡、玉貫古窯跡、鳥打沢A遺跡等が知られている。

鳥打沢A遺跡は、金沢製鉄遺跡群内の築窯された須恵器窯である。7世紀第3四半期に操業し、杯・杯蓋・盤・高杯・平瓶・甕・横瓶・壺・硯・甕など器種構成は豊富である。なかでも中空円面硯が出土しており、官衙遺跡との関連を示す遺物として注目される。

滝ノ原窯跡は出土遺物から入道迫瓦窯跡と近い年代と考えられ、玉貫古窯跡は出土遺物から8世紀代に位置付けられている。

現段階で把握されている須恵器窯をみると、陶窯単独で存在しているものは少なく、むしろ瓦窯・製鉄遺跡に内包される形で操業を行っていた可能性がある。製鉄・瓦生産が公的機関主導で操業していたとすれば、須恵器生産に関してもある程度は公的な性格があったものと考えられ、鳥打沢A遺跡から出土した中空円面硯や多様な器種を生産していたことは実に示唆的である。また、7世紀段階に位置付けられる窯跡は海岸部近くで操業が行われていたが、9世紀代になると内陸部に操業の場所が移動する傾向が見られる。

真野川・新田川・太田川・飯崎川の各河川兩岸の低位丘陵で製鉄に関連した遺跡が多数確認されることが、当地方の大きな特徴のひとつになっている。

特に新田川と真野川の間を展開する金沢製鉄遺跡群は、東日本最大規模の製鉄関連遺跡として著名で、7～9世紀後半にかけて継続した精錬創業が行われ、製鉄炉や木炭窯など具体的な変遷が判明している。

太田川と小高川に挟まれた丘陵では蛭沢遺跡・川内迫B遺跡群・出口遺跡・大塚遺跡の製鉄遺跡が点在している。蛭沢遺跡・川内迫B遺跡群は、具体的な内容が判明している稀有な例である。遺跡は8世紀後半から9世紀後半にかけて製炭・精錬を行っており、獸脚・器の生産にかかわる鋳型が出土し、この遺跡で火舎などの仏具生産に関わっていたことが知られ、当地方において宗教活動が行われていたことを示す重要な遺跡である。

集落遺跡については、近年の発掘調査の進展にともなって徐々に資料の蓄積を見ているが、いずれの調査も集落の一部に留まっているため、集落構造の全容が明らかになっている遺跡はない。

新田川の沖積地内の町遺跡や広畑遺跡は、泉庵寺跡に隣接する遺跡である。特に広畑遺跡は竪穴住居と掘立柱建物で構成される集落で、東西方向に配置された掘立柱建物は極めて計画性が高い。これらの建物跡より新しい時期の溝に投棄された土器には「寺」「厨」など官衙に関連する墨書が見られ、また灰釉陶器も出土しており泉庵寺との密接な関係が想定される。

法輪寺跡では竪穴住居と掘立柱建物で集落が構成され、8世紀末から9世紀初頭の年代が与えられている。竪穴住居では鉄製品を生産していた可能性が考えられる。

太田川北岸の微高地に営まれた町川原遺跡では、8世紀末から9世紀後半の9軒の竪穴住居が発見されているが、掘立柱建物は1棟も検出されておらず、広畑遺跡や法輪寺跡のような竪穴住居と掘立柱建物が共存する集落構成ではないことが指摘される。出土遺物には墨書土器や円面硯があり、行政機関との関係が窺える。また竪穴住居からは銅製帯金具が出土している。

大六天遺跡は、真野川南岸に営まれた古墳時代後期から平安時代にかけての集落である。土坑からは腕型鍛冶滓や鍛造剥片が出土し、集落内で鍛冶活動を行っていたことが判明している。

また、「小穀殿千之」と刻書された須恵器壺が出土したことから、本遺跡は一般集落と異なり古代軍団制との関連が想定される。

迎畑遺跡は真野川北岸の沖積地に形成された集落である。遺跡の一部しか調査が実施されていないため集落構成は不明であるが、2軒の竪穴住居や土坑が調査された。竪穴住居からは栗園式新段階から国分寺下層式、非ロクロ成形の土師器とロクロ成形の土師器が共存することから8世紀末～9世紀初頭の年代が与えられている。

市内の集落の特徴をみると、広畑遺跡・法輪寺跡のように竪穴住居と掘立柱建物で構成される集落と、町川原遺跡のように竪穴住居のみで構成される集落に分かれる。また、大六天遺跡のように集落内で鍛冶活動を行っていた集落もあり、集落の多様性を表している。

さらに現段階では奈良時代の集落の確認例は少ないが、平安時代になると各地で集落の数が増加する。この背景には、生活基盤の安定と社会状況の活性化があると考えられる。このことは律令政府の東北経営における政治的な緊張状態と不安定さとは反する状況である。

表1 奈良・平安時代遺跡一覧

	遺跡名	種別	所在地	備考
1	植松庵寺跡	寺院	原町区上北高平字植松	
2	横手庵寺跡	寺院	鹿島区横手字御所内	県指定
3	京塚瓦窯跡	窯跡	原町区雫字京塚沢	泉庵寺跡供給窯
4	大造瓦窯跡	窯跡	原町区雫字迫田	泉庵寺跡供給窯
5	入道迫瓦窯跡	窯跡	原町区上北高平字入道迫	植松庵寺跡供給窯
6	白坂瓦窯跡	窯跡	鹿島区横手字白坂前	
7	滝ノ原窯跡	窯跡	原町区馬場字滝ノ原	
8	町池窯跡	窯跡	原町区泉字町池	
9	玉貫古窯跡	窯跡	鹿島区北海老字玉貫	
10	鳥打沢A遺跡	窯跡	原町区金沢字鳥打沢	須恵器窯
11	金沢製鉄遺跡群	製鉄	原町区金沢地区	
12	川内迫B遺跡群	製鉄	原町区下太田字川内迫	獸脚鎚型・器物鋳型
13	蛭沢遺跡群	製鉄	原町区雫字蛭沢	
14	大塚遺跡	製鉄	原町区北原字大塚	
15	出口B遺跡	製鉄	原町区午来字出口	
16	大六天遺跡	集落	鹿島区江垂字大六天	小穀殿千之刻書土器
17	迎畑遺跡	集落	鹿島区北海老字迎畑	
18	広畑遺跡	集落	原町区泉字塚越	墨書土器・灰輪陶器
19	法輪寺跡	集落	原町区泉字寺前	
20	町遺跡	集落	原町区泉字町	
21	町川原遺跡	集落	原町区上太田字町川原	
22	三島町遺跡	集落	原町区三島町	
23	桜井B遺跡	集落	原町区上洪佐字原畑	
24	泉庵寺跡	官衙	原町区泉字寺家前・宮前・町池・町・館前	県指定

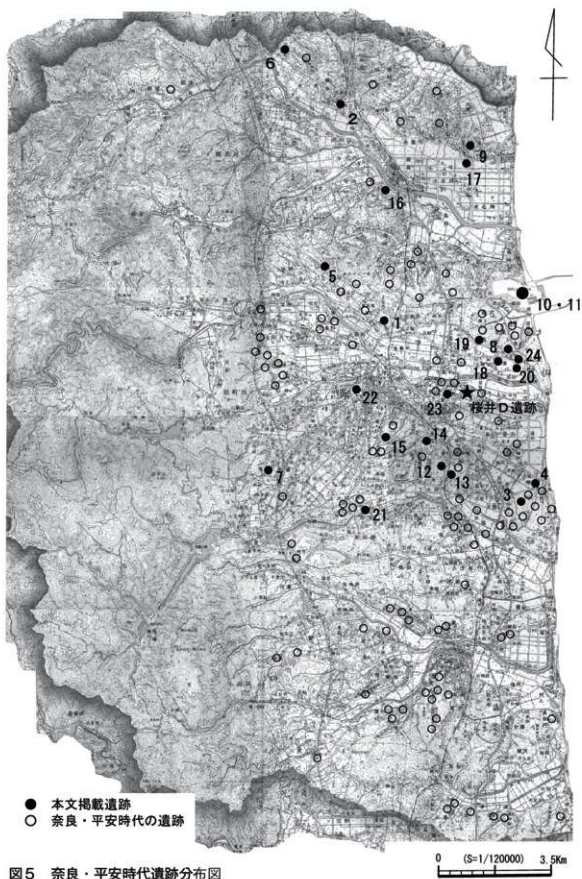


図5 奈良・平安時代遺跡分布図

第2章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

本開発予定地は、集合住宅新築計画に伴い平成20年5月19日に埋蔵文化財の有無について照会を受けた。福島県埋蔵文化財包蔵地図との照合ならびに現地踏査の結果、周知の埋蔵文化財包蔵地である『板井D遺跡』が所在していることが明らかとなったことから、開発工事前に試掘調査による遺構・遺物の確認とその結果による保存協議が必要である旨を口頭で回答した。

平成20年5月27日に提出された「開発予定地の試掘調査について（依頼）」に基づいて開発事業者と埋蔵文化財の取り扱いについての協議を実施した。その後、数度の担当者間の協議を経て、平成20年6月16日から試掘調査に着手し、同6月26日に試掘調査を終了した。

試掘調査は、開発予定地内に2×10mの調査区を5箇所設定して実施した。その結果、柱穴等の遺構を検出した。

この試掘調査の結果に基づいて再度開発業者と協議をおこない、工事による掘削が遺構面に及ばず保護層が十分に確保できる開発箇所については、発掘調査を実施せず工事中の立会いで対応し、工事による遺跡の破壊が免れない開発箇所については、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。本調査は平成20年10月28日から着手し、12月1日に終了した。

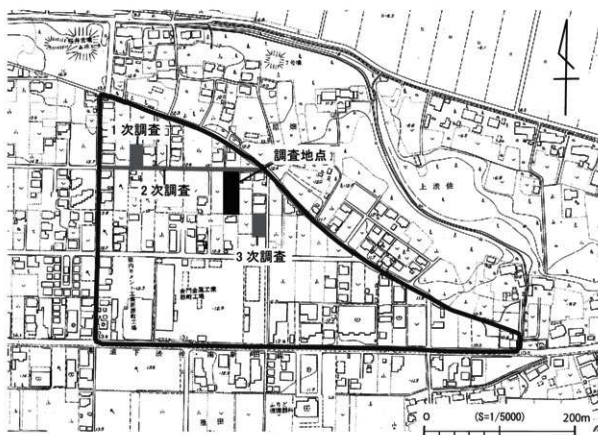


図6 調査地点位置図

第2節 調査の方法

調査対象地が3地点に分かれることから、調査地点をA地区・B地区・C地区に分けて調査を実施した。3地点とも表土掘削は重機を用いておこない、遺構確認作業ならびに精査作業は人力で実施した。

記録図面については、平面図は縮尺率1/20を基本として図化した。遺物の出土状況を記録する場合には、縮尺率1/10で実測してより詳細な記録に努めた。調査区の位置については、世界測地系の値で読み込み地形図に示した。断面図は縮尺率1/20で図化した。

記録写真については、35mm判モノクロフィルム・カラーリバーサルフィルム・カラーフィルムを使用して随時撮影し、必要に応じてデジタルカメラを併用して撮影した。

出土した遺物については、調査区・遺構・層位・遺物番号・日付を記入して取り上げた。

これらの遺物・実測図・記録写真については南相馬市教育委員会で整理保管している。

第3節 調査日誌

調査第1週（10月28日～31日）

A地区表土掘削・遺構確認を実施し、調査区東端で竪穴住居跡（SI01・02）を確認した。また、調査区全体にわたり多数のピットを確認した。

B地区表土掘削・遺構確認を実施し、調査区東端で竪穴住居跡1軒（SI03）、調査区西側で掘立柱建物跡（SB01）を確認した。また、調査区全体にわたり多数のピット確認した。

調査第2週（11月4日～7日）

A地区遺構確認。調査区北西端で土坑（SK01）を確認した。

B地区遺構確認。調査区北東で土坑（SK02）確認した。SI03・SB01・SK02精査、検出状況写真・断面写真・完掘写真撮影、断面図・平面図作成、レベリングを実施した。

調査第3週（11月10日～14日）

A地区SI01・02検出状況写真撮影、精査を実施後、SI02で床面を検出した。

調査第4週（11月17日～21日）

A地区SI01精査を実施後、床面を検出した。SI01・02断面写真・完掘写真撮影、断面図・平面図作成、レベリングを実施した。また、全体写真撮影、全体図作成をおこなった。

B地区全体写真撮影、全体図作成をおこなった。

調査第5週（11月29日～12月1日）

C地区表土掘削・遺構確認を実施し、竪穴住居跡（SI04・05）ならびにA地区SI01・02の続きのプランを確認した。SI01・02・05は検出写真撮影、平面図作成、レベリングを実施した。SI04は精査後に床面を検出し、断面写真・完掘写真撮影、断面図・平面図作成、レベリングを実施した。

第3章 調査内容

第1節 遺跡の概要

桜井D遺跡は、新井田川南岸の河岸段丘上面の平坦地に展開する弥生時代から平安時代までの遺構・遺物が確認される複合遺跡である。弥生時代中期後葉の標識遺跡として著名な本遺跡は、現在4つの地区に（桜井A～D遺跡）に区分されて埋蔵文化財包蔵地台帳に登録されている。

本遺跡の約250m北北西には古墳時代前期の前方後方墳である国指定史跡の桜井古墳が、約1.5km東北東には古代陸奥国行方郡家跡である福島県指定史跡の泉庵寺跡が所在する。

桜井D遺跡ではこれまでに本格的な発掘調査は行われていないが、過去に何度かの試掘調査が実施されている。平成17年には、個人住宅建設に伴う試掘調査（1次調査）で平安時代の住居と推測される竪穴住居跡ならびにこの住居跡に切られる土坑・溝跡等が検出されている。平成18年には、市道改良工事に伴う試掘調査（2次調査）が実施されたが遺構・遺物は確認されなかった。平成19年には、個人住宅建設に伴う試掘調査（3次調査）で竪穴住居跡と平安時代の土師器が確認されている。

第2節 調査区について

今回の調査対象地は、広大な面積をもつ遺跡北西部に位置する。現地表面の標高は12.5m前後を測る。調査区は、調査対象地内の建物建設に伴う地盤改良工事による掘削で遺構面を掘り込む2地点のうち、南側の調査区をA地区、北側の調査区をB地区として設定した。また、擁壁設置工事を実施する範囲をC地区として設定したが、工事による掘削が遺構面を掘り込む地点に関しては記録保存のための発掘調査を実施し、工事による掘削が遺構面を掘り込まない地点については、遺構を掘り込まずに検出した遺構の上場の記録保存で留めた。

A地区は約13m×約17m、B地区は約12.5m×約12mの長方形ならびに正方形に近い形状であり、C地区は擁壁設置箇所に合わせて約1m×約51mのL字状を呈する。

第3節 基本土層

本調査地点では堆積土が発達しておらず、各調査区における基本土層については若干の相違が見られる程度であった。以下に堆積土の概要を記す。

L I A：暗褐色土。耕作土ならびに後世の掘削等の影響を受けている堆積土を一括した。暗褐色を基調としているが、全体的に締りが弱く、土色・土質は地点によって多少異なる。遺物は極少量出土する。

L I B：黒色土。耕作等の影響を受けていないが全体的に締りが弱い。A・C地区では全体

第3節 基本土層

的に堆積が認められるが、B地区では堆積が認められない。遺構ならびにLⅡ・Ⅲの上位に5～35cmの厚さをもって堆積する。遺物は極少量出土する。

LⅡ：黒色土。LⅠBより暗く、しまりが強い。A・C地区のごく一部分で確認され、遺構の上位に層厚5～10cmをもって堆積する。遺物は極少量出土する。

LⅢA：暗褐色土。やや灰色がかった暗褐色を呈している。A・C地区の中央より北側で確認されるが、B地区では堆積が認められない。遺構の上位に層厚5～20cmをもって堆積する。遺物は極少量出土する。

LⅢB：黄褐色土。ロームブロック主体層。A・B・C地区の一部において確認される。層厚5～10cmをもって堆積するLⅣへ移行する漸移的な層である。遺物の出土は認められない。

LⅣ：黄褐色土（ハードローム）。A・B・C地区で堆積が確認される。本調査地点における地山である。遺構はこの層の上位で確認される。

LⅣはC地区の南側では標高11.6m前後、B地区の北側では標高11.7m前後で確認され、調査地点の南側と北側では約10cm程度の高低差をもって堆積しており、ほぼフラットな堆積状況と言える。

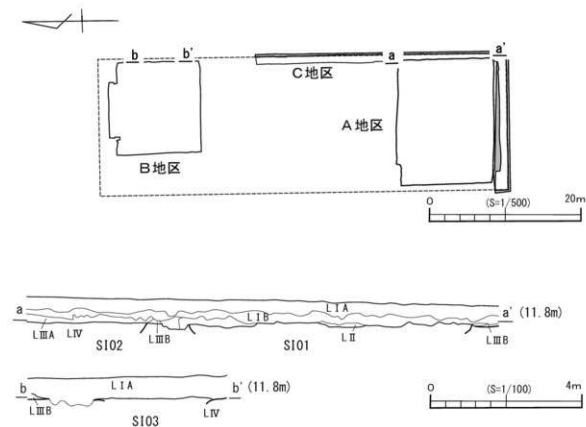


図7 基本土層

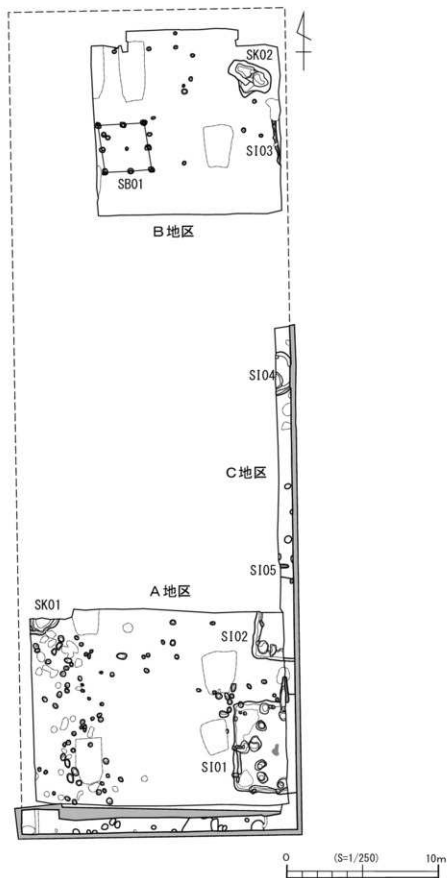


図8 遺構分布図

第4節 遺構・遺物

A・B・C地区あわせて竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡1棟、土坑2基等の多数の遺構が確認された。これらの遺構のうち全容をとらえられたものは少なく、制約はあるが以下に概要を述べていく。なお、竪穴住居跡は調査対象地の東側で、掘立柱建物跡は調査対象地の西側で検出されるという特徴がある。

本調査での遺物は、遺構内を中心にロクロ成形の土師器を主体として須恵器・鉄製品・鉄滓が出土しているが、縄文土器ならびに弥生土器の出土は認められない。

第1項 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（SIO1）

遺 構

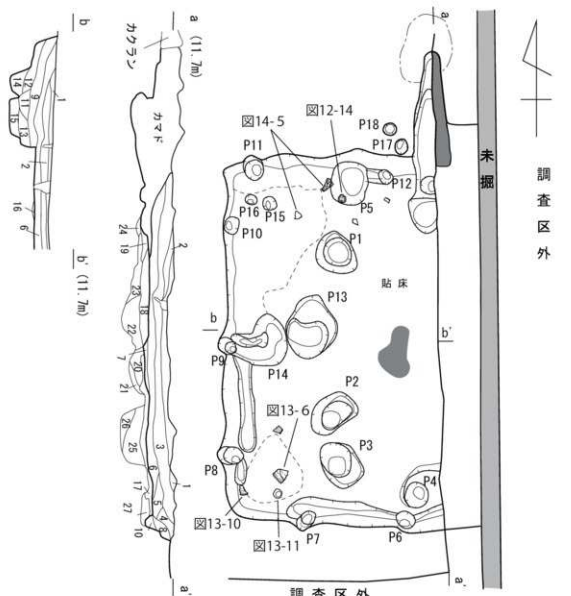
A地区・C地区の調査区東端、中央よりやや南側で確認された。検出面はLⅣ上面で、他の遺構との重複関係は認められない。遺構全体のおよそ半分しか検出されていないが、平面形は1辺6mを超える大型の隅丸方形を呈すると推測され、北壁のほぼ中央にカマドを有する構造と考えられる。

住居内堆積土は $\varnothing 1 \sim 27$ の27層に分けられる。 $\varnothing 1 \sim 15$ は黒色土～暗褐色土で、レンズ状の堆積状況を示しており自然堆積と考えられる。 $\varnothing 17 \sim 19$ は暗褐色土を基調とし、ロームブロックを多量に含む締まりの強い層で床面を構成している。 $\varnothing 20 \sim 27$ は暗褐色を基調とし、ロームブロックを多量に含む層で、人為的に埋め戻された掘形内埋土ならびに床面下で検出されたピットの堆積土である。

検出面から床面までの深さは最も深い所で39cmを計測する。床面は若干の凹凸があるもののほぼ平坦である。北西部と南西部では貼床面は確認されなかった。周壁は比較的急角度で立ち上がり、南側では周壁に沿って周溝が検出された。周溝の深さは幅22～32cm、床面から4～12cmを測る。

床面からはP1～16のピット16基が検出された。P1は長軸70cm、短軸60cm、深さ44cm、P2は長軸77cm、52cm、深さ53cm、P3は長軸78cm、短軸59cm、深さ58cmを測る。P2・3は近接した位置関係にあり同時に機能していたことは考えにくい。P1～3は、掘方の規模・配置状況から主柱穴と判断される。P6～12は長軸24～42cm、短軸20～31cm、床面からの深さは10～34cmを計測する。周壁に沿って確認されることから壁柱穴と考えられる。P4は長軸41cm、短軸37cm、深さ63cmを測る。周囲の床面が他の部分より一段高くなっており、入り口の施設に関わるものの可能性が考えられる。P5は長軸69cm、短軸58cm、深さ33cmを計測し、カマドに近接して検出されており貯蔵穴の可能性がある。

P17・18は住居外側の煙道付近にあり、P17は長軸24cm、短軸19cm、深さ40cm、P18は長軸19cm、短軸19cm、深さ20cmを測る。これらピットは、カマドの上屋施設に関連する



S101

- 1 黒色 粘性中、締まりやや弱、ローム粒中量、ロームブロック・土層少量、炭化粒・焼土粒微量。
- 2 黒褐色 粘性中、締まり中、黒色土ブロック中量、ローム粒少量、焼土粒微量。
- 3 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒中量、ロームブロック少量、炭化粒・焼土粒微量。
- 4 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒中量、(3層よりやや弱い)
- 5 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒中量、ロームブロック・灰白色粘土ブロック少量、炭化粒・焼土粒微量、(3層、6層より弱い)
- 6 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒・ロームブロック中量、炭化粒・焼土粒少量、(3層より弱い)
- 7 黒褐色 粘性中、締まり強、ローム粒・ロームブロック・焼土粒多量、炭化粒少量。
- 8 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒少量、ロームブロック微量。
- 9 黒褐色 粘性中、締まり極強、ローム粒・ロームブロック中量、炭化粒・焼土粒少量。
- 10 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒・ロームブロック多量、(6層より弱い)
- 11 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒中量、ロームブロック・炭化粒少量、焼土粒微量、(9層より弱い)
- 12 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒・ロームブロック中量、炭化粒・焼土粒微量。
- 13 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒・ロームブロック中量、(12層と類似)
- 14 黒褐色 粘性中、締まりやや弱、ローム粒・ロームブロック中量、焼土粒微量。
- 15 黒褐色 粘性中、締まりやや弱、ローム粒・ロームブロック・炭化粒中量、(14層と類似)
- 16 赤褐色 粘性中、締まり中、焼土粒極多量、炭化粒多量。
- 17 黒褐色 粘性中、締まり極強、ローム粒・ロームブロック極多量、炭化粒・焼土粒微量、(貼床)
- 18 黒褐色 粘性中、締まり極強、ローム粒極多量、ロームブロック多量、炭化粒・焼土粒少量、(貼床)
- 19 黄褐色 粘性中、締まり極強、ロームブロック主体層、(貼床)
- 20 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒多量、ロームブロック中量、焼土粒少量、炭化粒微量。
- 21 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒中量、ロームブロック少量、炭化粒・焼土粒微量。
- 22 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒・ロームブロック多量、炭化粒・焼土粒微量。
- 23 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒・ロームブロック極多量、焼土粒中量、炭化粒少量。
- 24 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒・ロームブロック多量、炭化粒少量、(2層より弱い)
- 25 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒・ロームブロック多量、黒色土ブロック中量、炭化粒・焼土粒微量。
- 26 黒褐色 粘性中、締まり中、ローム粒・ロームブロック多量、(25層より弱い)
- 27 黄褐色 粘性中、締まり中、ロームブロック主体層。

図9 1号住居跡実測図

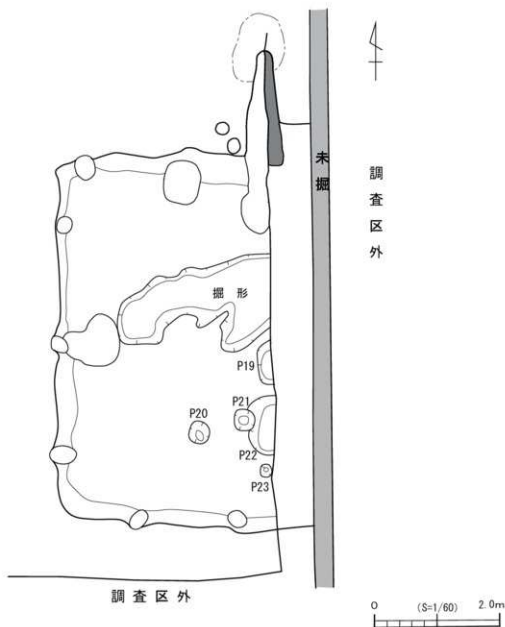


図10 1号住居跡掘形実測図

柱穴と推測される。

P19～23は床面下で検出されたピットで、長軸21～98cm、短軸19～47cm以上、深さ19～39cmを計測する。中央より南側でまとまって確認されている。

住居のほぼ中央の床面で、被熱による赤褐色化した範囲を確認した。遺構内堆積土からは鉄滓が出土しており、この赤褐色化した範囲は鍛冶炉として使用されていた可能性が考えられる。

カマド内堆積土は①～⑪の11層に分けられる。①はロームブロック主体層で煙道天井部の崩落土の可能性が考えられる。その他の堆積土は暗褐色～黒褐色を基調としており、炭化物粒・焼土粒を多く含む。⑧からは鉄滓が他の遺構内堆積土より比較的多く出土している。

燃焼部は住居内にあり、浅い掘り込みを持つが被熱による底面の赤褐色化等の変化は認めら

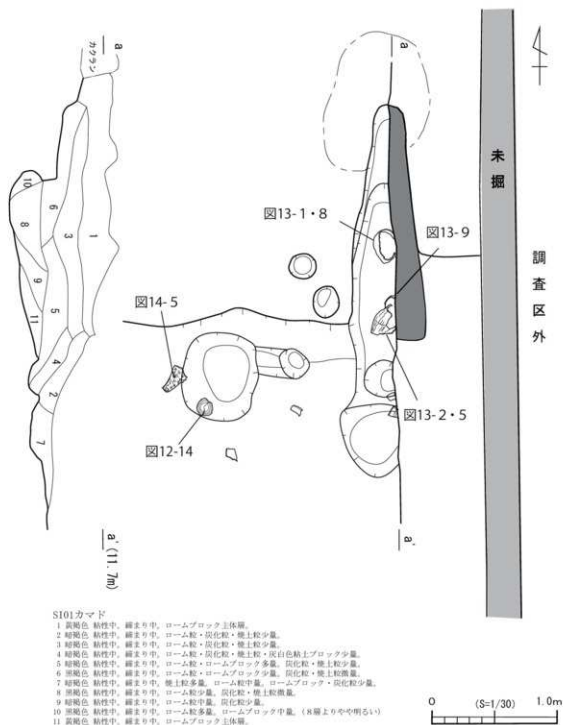


図 11 1号住居跡カマド実測図

れない。カマドの西側では軸は確認されなかった。燃烧部から煙道までの全長は2.7mを測る。煙道は住居外に延びており、北壁を幅35cm以上、長さ165cm程掘り込んで作られている。煙道底面は煙出側へ緩く上昇している。カマドの煙道内からは図13-1・2・5・8・9が底面より若干浮いた状態で斜めに置かれるように出土している。これらの土器は、煙道の補強材として使用されていたと考えられる。

遺物

S101からは多量の遺物が出土しており、土師器・須恵器が合計902点、鉄製品2点、鉄滓172g出土した。

図12は土師器の杯で、すべてロクロ整形されている。1～5・7～13は内面に黒色処理がされている。1～4は体部下半が内湾し、体部中段から口縁にかけて外傾する器形である。1～3は外面に体部下端に手持ちヘラケズリ、内面にミガキ、底部に回転系切り後調整を施している。4は外面に体部下端に回転ヘラケズリ、内面にミガキ、底部に回転ヘラケズリを加えている。5は器高が低く、皿に近い器形を呈し、内面にミガキ施されている。6は内面に輪積み痕を残している。7は体部全体が内湾する碗型に近い器形で、外面に体部下端には手持ちヘラケズリ、内面にはミガキが施され、底部はヘラ切りが行われている。8～13は墨書土器である。8～11は外面に体部下端には手持ちヘラケズリ、内面にはミガキが施されている。8の底部はヘラケズリ、9の底部は回転系切り、10・11の底部は回転系切り後調整を加えている。12・13は内面にミガキが施されている。8は「到」、9・10は「百」の文字が確認できる。11は墨書が薄いが残面からみてやはり「百」と推定される。12・13は文字の判別はできない。14・15はいわゆる「赤焼土器」である。体部の内外面ともにロクロナデで調整しており、内面に黒色処理は見られない。14の底部は回転系切り、15の底部はヘラケズリが施されている。

図13は土師器の甕で、すべてロクロ整形されている。器形は、頸部で一旦括れ、口縁部が強く外傾したのち短く直立して口縁端部を形成するものが主体的である。1～3・5は長胴の

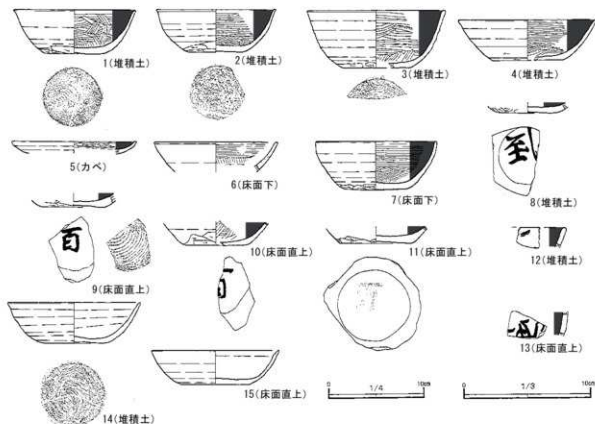


図12 1号住居跡出土遺物①

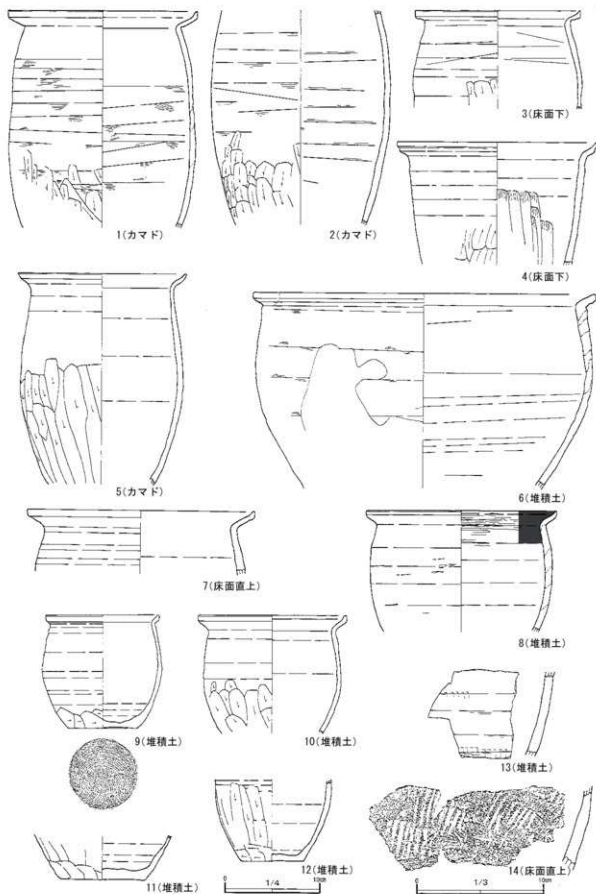


図 13 1号住居跡出土遺物②

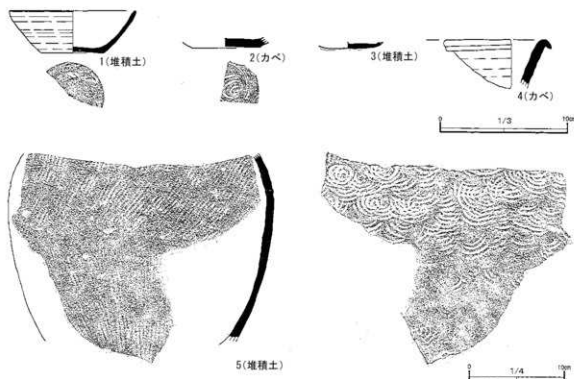


図14 1号住居跡出土遺物③

裏で、外面には体部中央より下半にかけて縦方向のヘラケズリが施されている。また、1～3は内外面にロクロヘラナデが加えられている。4も長胴の裏であるが、甗の可能性も考えられる。外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデで調整されている。6は広口短胴の裏で、外面はロクロヘラナデが施されているが、被熱により器面の一部が剥離している。8の内面は、口縁部から頸部にかけてミガキ、黒色処理がなされている。9は外面の体部下端に横方向のヘラケズリ、底部に回転系切りが認められる。10は外面の体部下半に縦方向のヘラケズリが施されている。11・12は底部資料で、外面にヘラケズリが加えられている。13・14は体部資料で、外面にタタキが確認される。

図14は須恵器を図示した。1～3は杯である。1は底部から口縁部にかけて外傾する器形で、内外面ともロクロナデで調整され、底部は回転系切りが認められる。2の底部は回転系切り後のヘラケズリが施されている。3の底部には焼成時に付着したと考えられる砂粒が認められる。4は長頸瓶の口縁部の破片である。5は体部上半に最大径を持つ器形の裏で、外面に平行タタキ、内面に同心円当てで具痕が確認される。

まとめ

鍛冶炉と考えられる焼土範囲が検出されたこと、鉄滓が出土したことから、本住居で鍛冶活動が行われていた可能性が指摘できる。また、SI02とカマド付近で近接していることから、同時並存は考えられず時期差があると推測される。

本住居の所属時期は、出土遺物から9世紀中葉～後葉と考えている。

2号竪穴住居跡 (S102)

遺 構

A地区・C地区でS101の北側に近接して確認された。検出面はLIV上面で、他の遺構との重複関係は認められない。遺構全体の半分以上が調査区外に展開しているが、平面形は1辺5m 50cm前後をはかる隅丸方形を呈すると推測される。

遺構内堆積土は①～⑩の10層に分けられる。①～⑧は暗褐色土を基調とし、レンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積と考えられる。⑨はロームブロックが主体を成す堆積土で、締まりが強く床面を構成している。⑩はロームブロックを多量に含む暗褐色土で、床面下で検出されたピットの堆積土である。

検出面から床面までの深さは最も深い所で30cmを測る。床面は若干の凹凸があるもののほぼ平坦である。周壁はやや緩やかに立ち上がり、周壁に沿ってやや幅の広い周溝が巡っている。周溝は幅33～80cmで、深さは床面から6～13cmを測る。

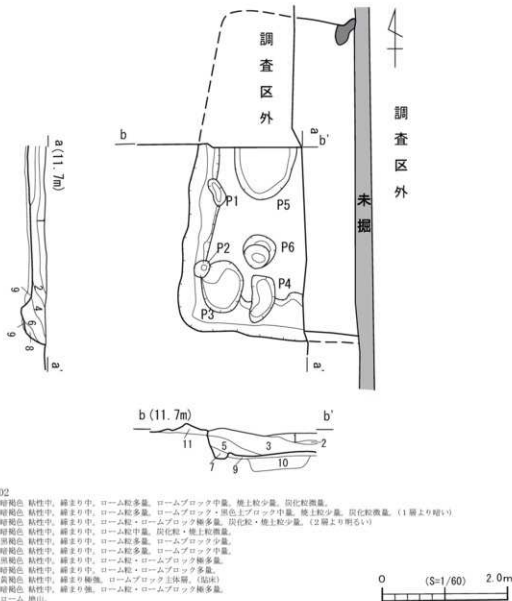


図 15 2号住居跡実測図

第4節 遺構・遺物

床面からはP1～4のビット4基が確認されている。P1は長軸45cm、短軸22cm、深さ18cm、P2は長軸30cm、短軸23cm、深さ12cm、P3は長軸85cm、短軸70cm、深さ16cm、P4は長軸79cm、短軸38cm、深さ23cmを測る。P1・2は壁柱穴と考えられ、P3・4も掘形の規模は大きいものの深さがないことから主柱穴ではなく壁柱穴と推測される。

床面下からP5・6のビット2基が検出された。P5は長軸87cm以上、短軸107cm、深さ18cm、P6は長軸54cm、短軸50cm、深さ37cmを測る。

住居北側でロームブロックが主体を成す堆積土を確認した。この堆積土には焼土ブロックが含まれることからカマドの一部（袖部）と考えられる。S102は北壁にカマドを持つ住居構造と判断され、S101と構造に共通性が認められる。

遺物

土器は土師器を中心に44点出土したが、いずれも小破片のため図化することができなかった。また、鉄滓が55g出土した。

まとめ

鉄滓が出土していることから、本住居で鍛冶活動が行われていた可能性が考えられる。また、内面が黒色処理されたロクロ整形の土師器の杯が出土していることから、本住居の所属時期については平安時代と考えられるが、S101のカマドと近接していることから、S101との同時並存は考えられず時期差があると推測される。

3号竪穴住居跡（S103）

遺構

B地区東端の中央で検出された。検出面はLIV上面で、他の遺構との重複関係は認められない。遺構西端部分が検出されただけで遺構の大半が調査区外に展開し、さらに北側では後世の掘削により破壊されているため平面形は不明である。また、遺構上部も後世の掘削を受けており、住居周壁の状況はほとんど確認できなかった。

遺構内堆積土は①～③の3層に分けられる。①は黒褐色、②は暗褐色を呈し、レンズ状堆積を示しており、自然堆積と考えられる。③はロームブロックが主体を成す堆積土で、締まりが強く床面を構成している。

検出面から床面までの深さは5cm前後を計測する。床面は若干の凹凸があるもののほぼ平坦である。周溝は幅11～25cm、床面からの深さは9～15cmを測る。周溝以外のカマド・柱穴等の施設は検出されなかった。

まとめ

遺構の大半が調査区外に展開しているため構造等については不明な点が多い。また、遺物が出土しなかったことから所属時期については不明であるが、調査区内からは縄文土器・弥生土器の出土が認められないことから、古代以降に所属すると考えられる。

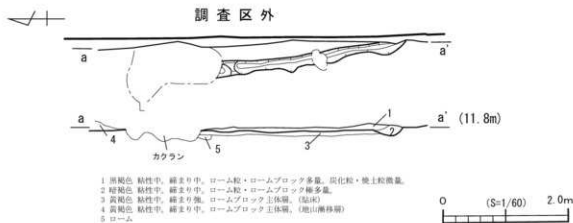


図 16 3号住居跡実測図

4号竪穴住居跡 (SIO4)

遺 構

C地区の北側で確認された。検出面はLIV上面で、他の遺構との重複関係は認められない。遺構の大半が調査区外に展開しており、平面形は不明であるがやや小型の円形に近い形状と推測される。

遺構内堆積土は、①～⑨の9層に分けられる。①～⑧は黒褐色土を基調とし、レンズ状堆積を示しており自然堆積と考えられる。⑨はローム粒・ロームブロックを少量含む締まりの強い黒褐色土で、住居の床面を構成している。

検出面から床面までの深さは47cmを測り、周壁は比較的急角度で立ち上がる。床面は若干の凹凸があるもののほぼ平坦である。住居北西部分では周溝の一部を確認した。周溝は幅20cm、深さ4cmを測る。周溝の以外のカマド・柱穴等の施設は確認されなかった。

遺 物

土師器を中心に18点出土した。図18-1～4は土師器で、5は須恵器である。1は底部から口縁部にかけて外傾する器形の杯で、外面の体部下半に手持ちヘラケズリ、内面はミガキ、黒色処理が施され、底部は回転系切り後ヘラケズリで調整されている。2は頸部で一旦括れ口縁部が強く外傾する甕で、外面に輪積み痕、内面にロクロナデを残す。3は鉢(播鉢か?)の底部破片である。4は口縁部がやや内湾し、器厚が厚く器高が高いことから碗もしくは鉢に近い器形が推定される。外面の体部下半に手持ちヘラケズリ、内面にミガキ、黒色処理がなされている。5は須恵器の甕の体部破片で、外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が認められる。

まとめ

遺構の大半が調査区外に展開しているため構造等については不明な点が多い。本住居の所属時期については出土遺物から9世紀中葉～後葉と考えている。

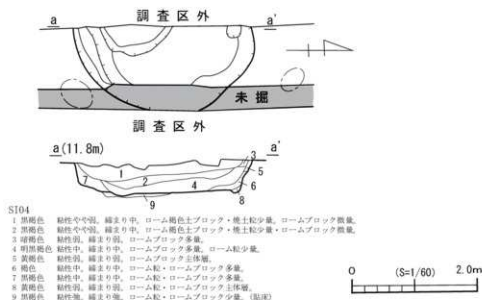


図 17 4号住居跡実測図

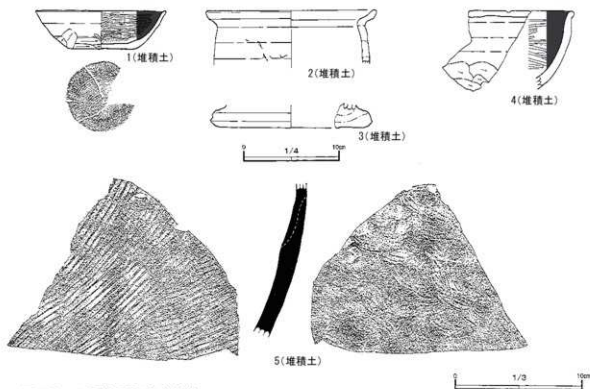


図 18 4号住居跡出土遺物

5号竪穴住居跡 (SI05)

遺 構

C地区のほぼ中央、SI02の北側に近接して確認された。検出面はLIV上面で、他の遺構との重複関係は認められない。黒褐色の堆積土を持つ長円形プランの遺構で、焼土粒を全体的に

多量に含むことからカマドの煙道と判断した。本住居跡はカマド煙道の東端のみの検出であることから、遺構の詳細な構造は不明であるが、東壁にカマドが設置された住居構造と推定される。

まとめ

遺構の大半が調査区外に展開しているため構造等については不明な点が多い。遺物が出土しなかったことから詳細な所属時期については言及できないが、カマドがS102と近接していることから、S102との同時並存は考えられず時期差があると推定される。

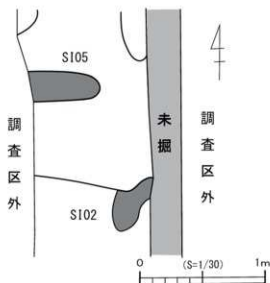


図19 5号住居跡カマド実測図

第2項 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (SB01)

遺構

掘立柱建物はB地区の西側で1棟検出された。検出面はLⅣ上面で、他の遺構との重複関係は認められない。9基の柱穴から構成される桁行2間×梁行2間の側柱建物で、建物主軸はN10°Wを示す。

柱間寸法は柱位置から計測し、北側柱列はP1-P2間で165cm、P2-P3間で135cm、東側柱列はP3-P6間で145cm、P6-P9間で150cmを測る。従って、東西総長3.0m×南北総長2.9mで、建物の平面形は正方形に近い形状を呈する。

柱穴の平面形は隅丸長方形に近い形状が多いが、円形や不整形のものもあり、長軸方向に統一性がなく、柱穴の形状に規格外は認められない。柱穴の長軸は22～42cm、短軸は18～35cm、検出面から底面までの深さは4～42cmを測る。最も遺存状況の良いP2は検出面から42cmの深さを有するが、平面規模に比べて浅い柱穴が多く、遺構上面は後世の掘削を受けていると推測される。P5は他の柱穴と比較すると小型で、深さも浅いことから床土と考えられる。P1～3、P6～9で柱痕を確認した。柱痕の直径は14～22cmを測る。

柱穴の堆積土は、柱痕ならびに掘方ともに黒色～暗褐色を呈し、ローム粒・ロームブロックを比較的多く含む。

まとめ

本建物に伴う柱穴から遺物は出土しなかったが、周囲の遺構等から平安時代所産と考えられる須恵器が出土していることから、本建物の所属時期は平安時代の可能性がある。

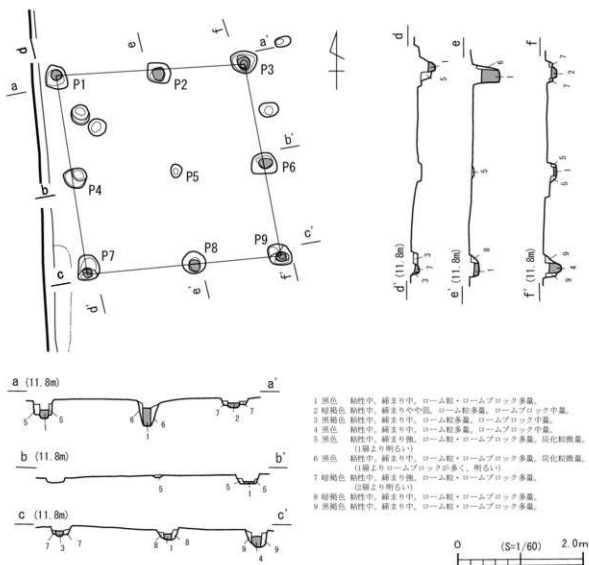


図 20 1号掘立柱建物跡実測図

第3項 土坑

1号土坑 (SK01)

遺 構

A地区北西端で検出された。検出面はLⅣ上面で、他の遺構との重複関係は認められない。遺構の大半が調査区外に展開しているため全体の平面形は不明である。検出部分の規模は長軸190cm以上、短軸110cm以上、検出面からの深さは57cmを測る。

遺構内堆積土は①～③の3層に分けられる。①～③は暗褐色土を基調とし、レンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積と判断される。

壁面は緩やかに立ち上がり、底面はやや西側に傾斜する。

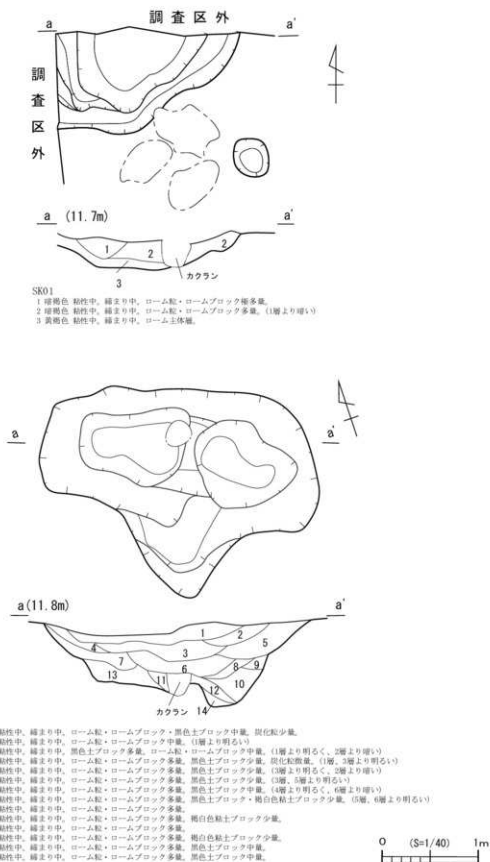


図 21 1号土坑・2号土坑実測図

まとめ

遺物が出土しなかったことから所属時期については不明であるが、調査区内からは縄文土器・弥生土器の出土が認められないことから、古代以降に所属すると考えられる。

2号土坑 (SK02)

遺 構

B地区北東で検出された。検出面はLⅣ上面で、他の遺構との重複関係は認められない。平面形は不整形長方形を呈しており、南西部分が舌状に張り出している。規模は長軸300cm、短軸220cm、検出面からの深さは90cmを測る。

遺構内堆積土は①1～14の14層に分けられる。①1～14は暗褐色土を基調とし、レンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積と判断される。

壁面は途中で角度を変えながら緩やかに立ち上がる。底面は平坦ではなく、東側で落ち込みが確認される。

遺 物

遺物が出土しなかったことから所属時期については不明であるが、調査区内からは縄文土器・弥生土器の出土が認められないことから、古代以降に所属すると考えられる。

第4項 その他の遺構

性格不明遺構

遺 構

C地区の南側において性格不明遺構が3基(SX01～03)検出された。これらの遺構は掘り込んで調査を行っておらず、上面確認で留めたため詳細は不明である。

SX01は長円形の平面形を呈し、黒褐色の堆積土が確認される。SX02は不整形の平面形を呈し、ロームブロックを多量に含む暗褐色の堆積土が確認される。SX03は長円形の平面形を呈し、暗褐色の堆積土が確認される。

まとめ

遺物が出土しなかったことから所属時期については不明であるが、調査区内からは縄文土器・弥生土器の出土が認められないことから、古代以降に所属すると考えられる。

ピット

遺 構

ピットはA・B・C地区合計で112基確認され、A・C地区の西側で密度が濃い分布状況を示している。ピット群の検出面はLⅣ上面で、他の遺構と重複関係はほとんど見られない。

これらのピットの大半は柱穴と考えられるが、柱痕跡をもつものはわずかで、また配置にも規則性を認められず、ピット群から復元できる遺構はなかった。

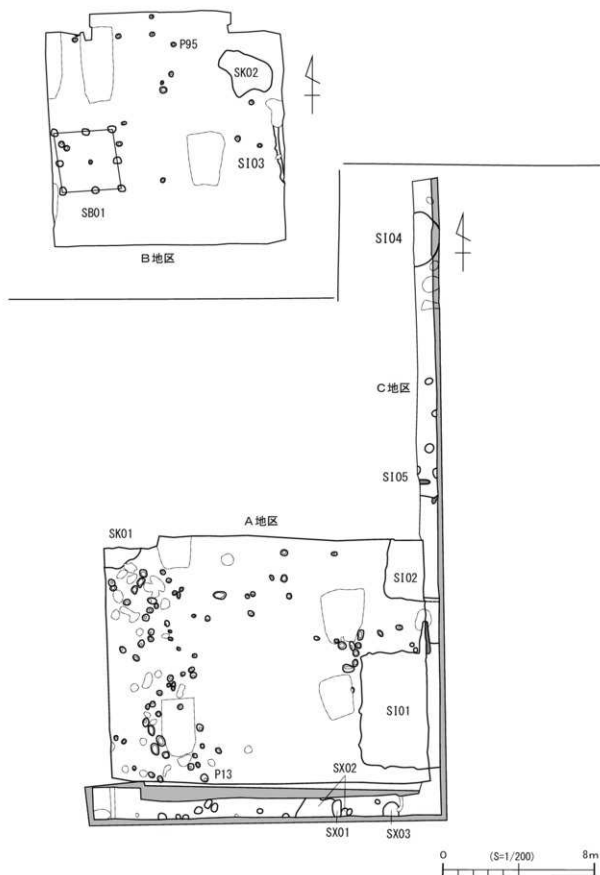


図 22 性格不明遺構・ピット分布図

第4節 遺構・遺物

ピットの平面形は円形・楕円形を呈するものが大半で、径は18～63cm、深さは13～34cmを測る。堆積土は大別して、黒色・黒褐色・暗褐色の3色を呈し、単一層で堆積している。いずれの堆積土もローム粒・ロームブロックを比較的多量に含む。

遺物

ピットからの出土遺物は少なく、P13からはロクロ整形された土師器の甕の口縁部破片が出土し、P95からは須恵器の杯の体部破片が出土したが、いずれも小破片のため図化することはできなかった。

まとめ

これらのピット群の所属時期は確定できないが、調査区内からは縄文土器・弥生土器の出土が認められないことから、古代以降に所属すると考えられる。

第5項 遺構外出土遺物

遺構以外からは土師器・須恵器が出土したがその数は少なく、A・B・C地区を合わせて44点しか出土しなかった。出土した遺物の大半が小破片であり、図化できたものは図23に掲載した5点のみであった。

図23-1は土師器の杯で、低部から内湾気味に立ち上がる。外面の体部下端に手持ちヘラケズリ、内面にミガキ、黒色処理が施され、底部には回転系切りが認められる。2は内面を黒色処理した土師器の杯の体部破片で、外面には文字の判読はできないが墨書が確認される。3・4は頸部で一旦括れ、口縁が強く外傾する土師器の甕の破片資料である。3は内面にミガキ後に黒色処理が施されている。4は内外面ともにロクロナデで調整を施している。5は須恵器の甕の体部破片で、甕に転用されている。



図23 遺構外出土遺物

第4章 まとめ

第1節 遺物について

本調査では、土師器を中心に須恵器・鉄製品・鉄滓等が出土している。このうち S101 で良好な土器の一括資料を得ることができたので検討してみたい。

土師器の杯はいずれもロクロを用いて製作されており、黒色処理を施すものと施さないものに大別される。黒色処理が施されない杯は、いわゆる「赤焼土器」である。

黒色処理を施した杯は体部下半が内湾し、体部中段から口縁にかけて外傾する器形が多い。底部の切り離し技法は回転系切り後に再調整を加えているものが主体をなしている。体部下端には手持ちヘラケズリによる再調整を施しているものが多く回転ヘラケズリも見られる。内面にはミガキを加えているものが大半である。このほかに体部全体が内湾する椀型のもの（図 12-7）や器高が低く皿型を呈するもの（図 12-5）が見受けられる。「赤焼土器」は内外面にロクロナデで調整しており、底部に回転系切り後に再調整を施しているものもある。

土師器の甕もすべてロクロを用いて製作されている。口縁部に最大径を持つものが多く、長胴のものとしてそれ以外のものに大別される。器形は頸部で一旦括れ、強く口縁が外傾したのち短く直立して口縁端部を形成するものが主体的である。外面には体部下半に縦位のヘラケズリを施すものが大半で、内面にはロクロナデを残すものがほとんどである。また、破片のため器形は不明であるが、外面にタタキが確認される体部資料も出土している。

須恵器の杯については、内外面ともロクロナデで調整され、底部は回転系切り後無調整のものが主体をなす。

以上のように S101 の土器群は、原町火力発電所建設に伴い大規模な発掘調査を実施した金沢製鉄遺跡群の VII 群土器の特徴と非常に類似していることから、VII 群土器と同様に 9 世紀中葉～後葉の年代が妥当であると考えられる。

本調査では、上記の遺物とともに 7 点の墨書土器が出土している。墨書土器はすべて土師器の杯であり、底部または体部に墨書が書かれている。1 点のみ遺構外からの出土で、ほかの 6 点は S101 から出土している。S101 出土の 6 点のうち 4 点は文字が判読でき、「百」が 3 点、「到」が 1 点となっており「百」が多く見受けられる。

通常、墨書土器には地名・施設・人名・職名を表す文字や吉祥句と考えられる文字が書かれることが多い。今回の調査では、「百」・「到」が何を表現しているのか類推できる成果は得られていない。また、これまでに南相馬市内からは「百」・「到」の墨書は出土していないため、ほかの遺跡の調査成果から推測することもできない。以上のことから「百」・「到」が表しているものは不明と言わざるを得ないが、吉祥句を表現している可能性が考えられる。

なお、遺構外からではあるが硯に転用された須恵器の甕の破片が出土しており、前述の墨書等を書くことに使用されたと考えられる。

第2節 遺構について

本調査地点では、A・B・C地区合わせて竪穴住居5軒、掘立柱建物1棟、土坑2基等が検出された。

竪穴住居は5軒（S101～05）確認されたが、遺構全体を確認できたものはなかった。しかし、このうち3軒の住居（S101・02・05）はカマドが敷設される住居構造であることが明らかとなった。S102・05のカマドについては掘込んで調査を実施していないため詳細は不明である。S101のカマドは、西側の袖部は確認されなかったが、煙道には底部を欠損した土師器の甕が、補強材として使用されている構造であった。

この3軒の住居はそれぞれのカマド付近で近接して確認されることから、同時並存の可能性は考え難く時期差を持つと推測される。このことから本調査地点では、幾つかの時期にわたり集落が形成されていたと推定される。また、S101・02は隅丸方形の平面形を呈すると推測され、主軸方向も同一で共通性が認められることから、異なる時期においても集落構成に規格性があったことが考えられる。

S101は貼床を持ち、主柱穴を備え、周壁に周溝・壁柱穴が巡る住居構造をもつ。平面規模は1辺6mを超える大型の住居で、同時期の一般的な竪穴住居の平面規模とは異なる。南側では貼床が一段高くなっており、柱穴と推測されるビットが確認されることから、入り口施設が設置されていたと推定される。貼床では一部で焼土の堆積が確認され、住居内堆積土より鉄製品・鉄滓が出土している。このことから貼床で確認された焼土は、鍛冶炉と推測され、S101では鍛冶活動を行っていた可能性が高い。

また、S102では鍛冶炉と考えられる施設は確認されていないものの、遺構内堆積土から鉄滓が出土していることから、桜井D遺跡では集落内で複数の時期にわたって鍛冶活動を行っていた可能性が指摘できる。桜井D遺跡以外にも南相馬市内では、荒井前遺跡・法輪寺跡・大六天遺跡などで集落内での鍛冶活動が想定されており、当地方における古代集落の一つの特徴になっている。

B地区では2間×2間の床をもつ掘立柱建物（SB01）が確認された。建物に伴う出土遺物がなく、ほかの遺構との重複関係もないことから詳細な時期は不明であるが、表土ならびに周囲の遺構から平安時代所産と考えられる須恵器が出土していることから、SB01は平安時代に構築された可能性も考えられる。もし仮にSB01が平安時代の建物とするならば、本調査地点では平安時代の竪穴住居も確認されていることから、掘立柱建物と竪穴住居が並存する集落が展開していたことが指摘できる。南相馬市内では広畑遺跡・法輪寺跡などで掘立柱建物と竪穴住居が並存する集落構造が確認されている。

桜井D遺跡は過去の試掘調査においても平安時代の竪穴住居が確認されており、本調査地点を含めて遺跡の広範囲にわたって平安時代の集落が形成されていたことが明らかとなっている。しかし、本格的な発掘調査は本調査地点でしか行われておらず、具体的な集落構造は不明であり、今後の調査成果を待って検討していきたい。

表2 1号住居跡出土遺物観察表

押印番号 図版番号	種別 器種	部位	口径 器高 底径	成形・調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
図12-1	土師器 杯	口~底	65 46 61	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ,ヘラケズリ 底部:回転糸切り後ヘラケズリ	砂粒 スコリア	良	浅黄橙 (75YR8/6)	
図12-2	土師器 杯	口~底	(12)6 45 58	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ,ヘラケズリ 底部:回転糸切り後ヘラケズリ	砂粒 石英	良	橙 (75YR6/6)	
図12-3	土師器 杯	口~底	(14)4 61 72	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ,ヘラケズリ 底部:回転糸切り後ヘラケズリ	砂粒 石英	良好	にぶい橙 (75YR7/4)	
図12-4	土師器 杯	口~底	(14)6 43 74	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ,回転ヘラケズリ 底部:回転ヘラケズリ	砂粒 石英 スコリア 角閃石	良好	にぶい橙 (75YR7/3)	
図12-5	土師器 杯	口~体	(13)0 (13) —	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ	砂粒	良好	橙 (75YR6/6)	
図12-6	土師器 杯	口~体	(13)0 (31) —	内面:ミガキ 外面:ロクロナデ	砂粒 スコリア	良	にぶい橙 (75YR7/4)	
図12-7	土師器 杯	口~底	(12)8 51 64	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ,ヘラケズリ 底部:ヘラケズリ	砂粒 スコリア	良好	にぶい橙 (75YR7/4)	
図12-8	土師器 杯	体~底	— (11)1 60	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ヘラケズリ 底部:ヘラケズリ	砂粒 石英	良好	にぶい黄橙 (10YR6/4)	底部に墨書 「百」
図12-9	土師器 杯	体~底	— (15)5 66	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ヘラケズリ 底部:回転糸切り後ヘラケズリ	砂粒 石英	良好	橙 (5YR6/6)	底部に墨書 「百」
図12-10	土師器 杯	体~底	(24) 66 66	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ,ヘラケズリ 底部:回転糸切り後ヘラケズリ	砂粒 石英 スコリア	良	橙 (5YR7/8)	底部に墨書 「百」
図12-11	土師器 杯	体~底	— (18)8 78	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ヘラケズリ 底部:回転糸切り	砂粒 石英 スコリア	良	にぶい黄橙 (10YR7/4)	底部に墨書 「百」
図12-12	土師器 杯	口~体	— (15)5 —	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ	砂粒 石英	良好	にぶい黄橙 (10YR6/4)	口縁部に墨書
図12-13	土師器 杯	体	— (15)5 —	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ	砂粒	良	明黄褐 (10YR7/6)	体部に墨書
図12-14	赤焼土器 杯	口~底	14.0 4.3 7.4	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底部:回転糸切り後ナデ	砂粒 スコリア	堅牢	黄橙 (10YR8/6)	
図12-15	赤焼土器 杯	口~底	13.4 3.6 7.2	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底部:ヘラケズリ	砂粒 石英 スコリア	良好	にぶい橙 (5YR6/3)	
図13-1	土師器 罍	口~体	(20)0 (23)0 —	内面:ロクロナデ,ロクロナデ 外面:ロクロナデ,ロクロナデ, ヘラケズリ	砂粒 石英 雲母 スコリア	良好	にぶい黄橙 (10YR6/4)	
図13-2	土師器 罍	体	(22)7 —	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ,ヘラケズリ	砂粒 石英	良好	にぶい黄褐 (10YR5/3)	
図13-3	土師器 罍	口~体	(17)5 (17)8 —	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ,ヘラケズリ	砂粒 石英	良	にぶい橙 (75YR7/4)	
図13-4	土師器 罍	口~体	(21)0 (13)0 —	内面:ロクロナデ,ヘラケズリ 外面:ロクロナデ,ヘラケズリ	砂粒 石英	良	にぶい褐 (10YR6/3)	瓶の可能性 あり
図13-5	土師器 罍	口~体	(17)8 (22)3 —	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ,ヘラケズリ	砂粒 石英	良	灰白 (2.5YR7/1)	

第2節 遺構について

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位	口径 器高 底径	成形・調整技法の特徴	胎土	焼 成	色調	備考
図13-6	土師器 甕	口~体	(36.2) (21.0) —	内面:ロクロヘラナデ 外面:ロクロヘラナデ	砂粒 石英 長石 スコリア	良好	橙 (7.5YR7/6)	被熱により 表面剥離
図13-7	土師器 甕	口~体	(24.0) (6.7) —	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	砂粒 石英	良	明赤褐 (2.5YR5/8)	
図13-8	土師器 甕	口~体	(30.0) (12.7) —	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ	砂粒 石英 雲母	良	にぶい黄褐 (10YR5/3)	輪積痕
図13-9	土師器 甕	口~底	(12.0) 11.9 7.3	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ,ヘラケズリ 底部:回転糸切り	砂粒 石英	良	明赤褐 (2.5YR5/8)	
図13-10	土師器 甕	口~体	(7.9) (12.4) —	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ,ヘラケズリ	砂粒 石英 スコリア	良	にぶい橙 (5YR7/4)	
図13-11	土師器 甕	体~底	— (4.7) 8.8	内面:ロクロナデ 外面:ヘラケズリ 底部:ヘラナデ	砂粒 石英 スコリア	やや 不良	橙 (5YR6/6)	
図13-12	土師器 甕	体~底	— (8.6) 6.6	内面:ロクロナデ 外面:ヘラケズリ 底部:ヘラナデ	砂粒 石英	良	橙 (5YR7/6)	
図13-13	土師器 甕	体	— (6.6) —	内面:ロクロナデ 外面:タタキ,ヘラナデ	砂粒	良	明赤褐 (5YR5/6)	
図13-14	土師器 甕	体	— (6.6) —	内面:ロクロナデ 外面:タタキ,ヘラナデ	砂粒 石英 雲母	堅半	褐 (7.5YR4/3)	
図14-1	須恵器 杯	口~底	13.4 4.4 6.4	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底部:回転糸切り	砂粒 黒色粒	良好	灰白 (10YR7/1)	
図14-2	須恵器 杯	体~底	— (1.1) (7.0)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ 底部:回転糸切り後回転ヘラケズリ	砂粒	堅半	灰白 (5Y6/1)	
図14-3	須恵器 杯	体~底	— (0.7) (4.4)	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	砂粒	堅半	灰白 (N6)	
図14-4	須恵器 短頸瓶	口~体	— (3.8) —	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	砂粒 石英 雲母	堅半	灰白 (5Y5/1)	
図14-5	須恵器 甕	体	— (19.6) —	内面:同心円当て具痕 外面:平行タタキ,ヘラケズリ	砂粒 石英	良好	灰白 (10YR5/1)	

表3 4号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	種別 器種	部位	口径 器高 底径	成形・調整技法の特徴	胎土	焼 成	色調	備考
図18-1	土師器 杯	口~底	13.8 4.0 6.8	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ,ヘラケズリ 底部:回転糸切り後ヘラケズリ	砂粒	良	にぶい黄褐 (10YR7/3)	
図18-2	土師器 甕	口~体	(9.0) (5.6) —	内面:ヘラナデ 外面:ロクロナデ	砂粒 石英	良	橙 (7.5YR6/6)	輪積痕
図18-3	土師器 鉢 (撰鉢か?)	体~底	— (2.4) (15.0)	外面:ナデ 底部:ヘラナデ?	砂粒	良	にぶい黄褐 (10YR7/4)	
図18-4	土師器 杯	体	— (6.0) —	内面:ミガキ,黒色処理 外面:ロクロナデ,ヘラケズリ	砂粒 石英	良好	にぶい褐 (2.5YR6/4)	
図18-5	須恵器 甕	体	— (14.1) —	内面:同心円当て具痕 外面:平行タタキ	砂粒 石英	堅半	灰 (N6)	

表4 遺構外出土遺物観察表

調査番号 図版番号	種別 器種	部位	口径 器高 底径	成形・調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
図23-1	土師器 杯	体-底	— (3.1) (8.0)	内面：ミガキ, 黒色処理 外面：ロクロナデ, ヘラケズリ 底部：回転糸切り	砂粒 石英	良	浅黄橙 (7.5YR8/3)	
図23-2	土師器 杯	体	— (2.3) —	内面：ミガキ, 黒色処理 外面：ロクロナデ	砂粒 スコリア	良	にぶい橙 (5YR7/4)	体部に黒書
図23-3	土師器 壺	体	— (5.0) —	内面：ミガキ, 黒色処理 外面：ロクロナデ	混入物をほとんども含ま ず緻密	良	橙 (7.5YR6/6)	
図23-4	土師器 壺	体	— (7.5) —	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ	砂粒 石英	良	にぶい橙 (7.5YR5/3)	
図23-5	須恵器 壺	体	— (6.5) —	内面：ヘラナデ 外面：ヘラケズリ	砂粒 石英	堅牢	暗灰 (N3)	転用履

引用・参考文献

- 青山博樹ほか 1998 「大狼田遺跡（2次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告11』
福島県教育委員会
- 青山博樹ほか 2007 「北山下遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告47』 福島県教育委員会
- 青山博樹ほか 2008 「大田切遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告46』 福島県教育委員会
- 荒 淑人ほか 2007 『泉庵寺跡—陸奥国行方郡家の調査報告—』 南相馬市教育委員会
- 荒 淑人 2008 『泉庵寺跡—陸奥国行方郡家出土瓦の報告—』 南相馬市教育委員会
- 井 憲治ほか 2000 「鍛冶屋遺跡（1次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告21』
福島県教育委員会
- 石本 弘ほか 1992 「笹目平遺跡」『矢吹地区遺跡発掘調査報告10』 福島県教育委員会
- 宇佐見雅夫ほか 1997 『赤粉遺跡』 橋葉町教育委員会
- 笠井崇吉ほか 2006 「熊平B遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告43』 福島県教育委員会
- 川田 強 2001 『角部内南台遺跡』 小高町教育委員会
- 川田 強 2002 『東広畑B遺跡』 小高町教育委員会
- 川田 強ほか 2007 「板井D遺跡」『南相馬市内遺跡発掘調査報告書3』
南相馬市教育委員会
- 川田 強ほか 2008 「板井D遺跡」『南相馬市内遺跡発掘調査報告書4』
南相馬市教育委員会
- 榎田克史ほか 2002 「小山B遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告30』 福島県教育委員会
- 木本元治ほか 1988 「境A遺跡」『国道113号バイパス遺跡調査報告IV』
福島県教育委員会
- 鈴鹿良一ほか 1992 「北大久保E遺跡（堰ノ上B遺跡）」『矢吹地区遺跡発掘調査報告9』
福島県教育委員会
- 玉川 一郎 1985 『国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書』 原町市教育委員会

- 戸田 有二 2000 「玉貫古窯跡」『鹿島町市 第三巻 原始・古代・中世資料』 鹿島町
- 戸田 有二 2000 「大六天遺跡」『鹿島町市 第三巻 原始・古代・中世資料』 鹿島町
- 戸田 有二 2000 「迎畑遺跡」『鹿島町市 第三巻 原始・古代・中世資料』 鹿島町
- 戸田 有二 2000 「横手庵寺跡」『鹿島町市 第三巻 原始・古代・中世資料』 鹿島町
- 戸田 有二 2000 「真野古城跡」『鹿島町市 第三巻 原始・古代・中世資料』 鹿島町
- 能登谷宣康ほか 2001 「鍛冶屋遺跡（2次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告24』
福島県教育委員会
- 橋本博幸ほか 1986 「北原遺跡」『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅱ』
福島県教育委員会
- 橋本博幸ほか 1987 「三貫地遺跡」『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅲ』
福島県教育委員会
- 原町市 2005 『原町市史』 第8巻 特別編Ⅰ 自然
- 原町市教育委員会 1997 「植松B遺跡」『原町市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 原町市教育委員会 1998 『蛭沢遺跡群C・D地区』
- 福島県教育委員会 1991～1998 『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅰ～Ⅸ』
- 堀 耕平ほか 2000 「広畑遺跡」『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
原町市教育委員会
- 堀 耕平ほか 2001 「町遺跡」「法輪寺跡」
『県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 原町市教育委員会
- 堀 耕平ほか 2006 「桜井D遺跡」『南相馬市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
南相馬市教育委員会
- 南相馬市教育委員会 2005 『町川原遺跡』
- 安田 稔ほか 1998 「上宮崎A遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告Ⅰ』
福島県教育委員会
- 山内幹夫ほか 2002 「鍛冶屋遺跡（3次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告28』
福島県教育委員会

写 真 图 版



1 A地区全景



2 B地区全景



1 1号住居跡完掘状況



2 1号住居跡断面



3 1号住居跡遺物出土状況



4 カマド完掘状況



5 カマド断面



6 カマド遺物出土状況



1 2号住居跡完掘状況



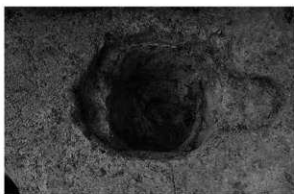
2 2号住居跡断面



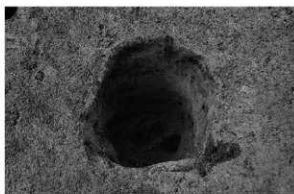
3 3号住居跡完掘状況



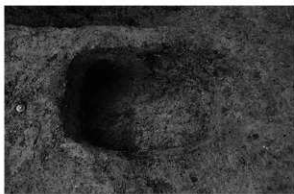
1 1号掘立柱建物跡完掘状况



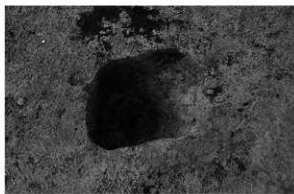
2 1号掘立柱建物跡P1完掘状况



5 1号掘立柱建物跡P2完掘状况



4 1号掘立柱建物跡P7完掘状况



5 1号掘立柱建物跡P9完掘状况



1 1号土坑完掘状況



2 1号土坑断面



3 2号土坑完掘状況



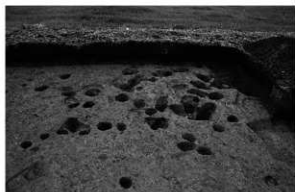
4 2号土坑断面



5 ビット群完掘状況①



6 ビット群完掘状況②



7 ビット群完掘状況③



8 ビット群完掘状況④



1 C地区遺構検出状況①



2 C地区遺構検出状況②



3 C地区遺構検出状況③



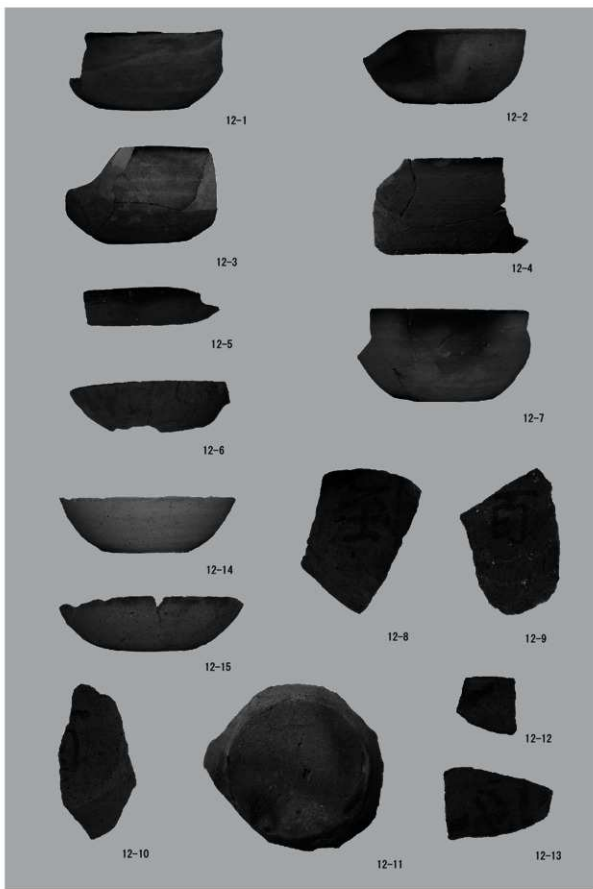
4 4号住居跡検出状況



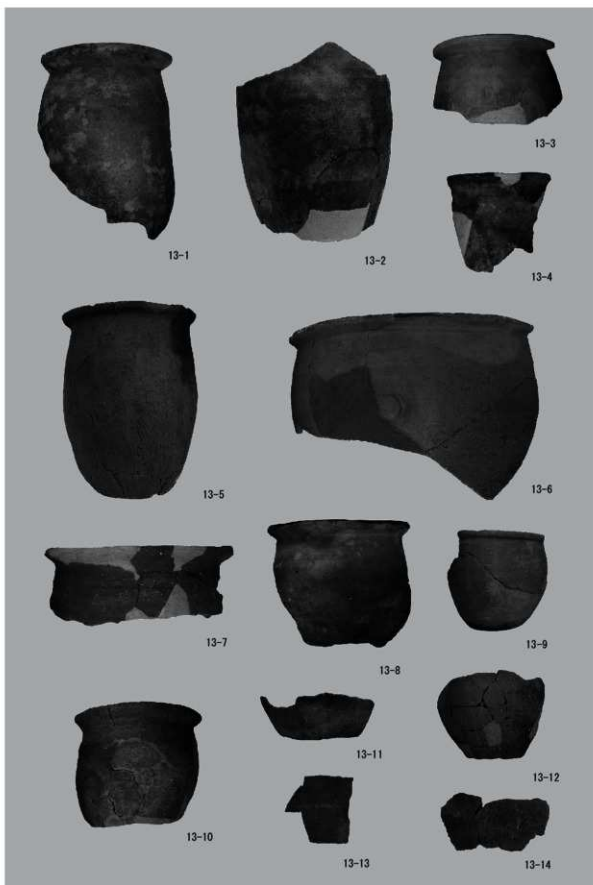
5 4号住居跡完掘状況



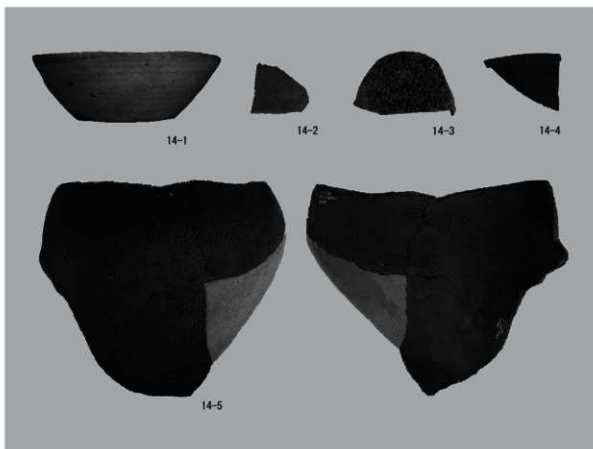
6 4号住居跡断面



1 1号住居跡出土遺物①



1 1号住居跡出土遺物②



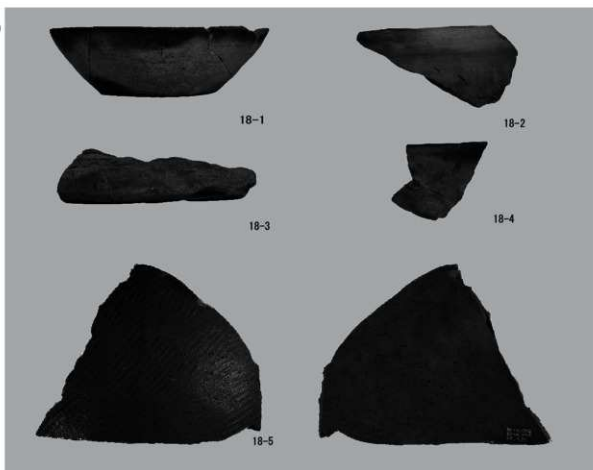
1 1号住居跡出土遺物③



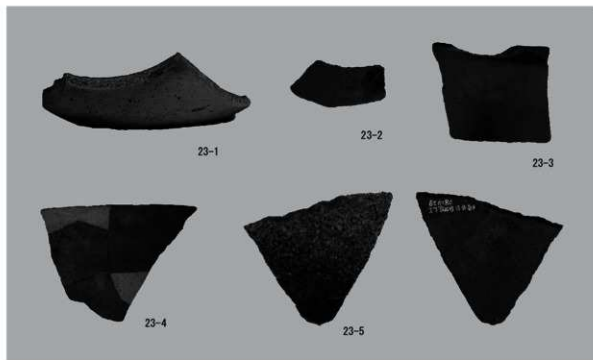
2 1号住居跡出土鉄製品・鉄滓



3 2号住居跡出土鉄滓



1 4号住居跡出土遺物



2 遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	さくらいでいいせき						
書名	桜井D遺跡						
シリーズ名	南相馬市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第13集						
編著者名	佐川 久						
編集機関	福島県南相馬市教育委員会文化財課						
所在地	〒975-0012 福島県南相馬市原町区三島町二丁目 45						
発行年月日	2009. 3. 27						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡				
さくらいでいいせき 桜井D遺跡	南相馬市原町区上野佐 字原田	072125	175	37° 38' 20"	140° 59' 35"	405	集合住宅新築
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項	
桜井D遺跡	集落跡	平安時代		竪穴住居・ 掘立柱建物等	土俵器・ 須恵器等	9世紀中葉～後葉の集落跡	

南相馬市埋蔵文化財調査報告書第13集

桜井D遺跡
— 古代集落跡の調査 —

印刷 2009年3月23日

発行 2009年3月27日

編集 南相馬市教育委員会 文化財課
発行 南相馬市教育委員会
〒975-0012 福島県南相馬市原町区三島町二丁目45番地
印刷 有限会社 ライト印刷
〒975-0073 福島県南相馬市原町区北新田字信田370-1
